



筑紫女学園大学リポジット

A Modern Taiwanese Author, Wang You Hua' s Life and Views on Writing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/97

台湾現代文学者王幼華の作家人生と創作観について

石 其 琳

A Modern Taiwanese Author, Wang You Hua's Life and Views on Writing

Kilin SEKI

前言

台湾現代文学者王幼華とその長編小説の作品《土地と靈魂》^(注1)が、今回の研究対象である。また私はこの作品の日本語訳書の出版を計画している。作品をより深く理解するために、小説《土地と靈魂》の創作意図及び背景については、別の機会でとりあげることにして、本文は主に彼のこれまで創作に関わった経緯及び経歴と文学関連の著作を紹介し、その創作観について明らかにするのが目的である。まず作品《土地と靈魂》の説明と、日本語訳を行った理由と目的を述べよう。

《土地と靈魂》は、1992年台湾で出版された長編小説である。百数十年以上前に台湾で発生した実際の事件をもとに、作者の詳細な考証が小説の内容に練り込まれ、同時に当時の台湾の風貌を描写している。内容は伝奇的人物英国人船長である探検家ホーンの実話を軸に、彼と台湾原住民ガマラン族の女性高春風との恋情、そして現地の番人たちを率いて楽土を開拓し、漢人たちの弾圧に対抗する悲壮な物語を描写している。この作品が主張したのは突破的な歴史観、つまり台湾歴史に対する新たな解説である。作品の発表後、台湾社会に大きな震撼を与え、同時に多くの議論を引き起こしている。この点については後に触れるが、作品の表現には人道主義的情操及び良心的反省の精神が満ちていると高評価され、1992年台湾における学術文学賞「中山文芸賞」^(注2)を受賞している、さらに1993年台湾新聞局（政府の出版管理機構）より小、中学生優良課外図書として認定されている。

一 作品を日本語に翻訳する理由と目的

この作品を日本語に翻訳する、または日本で出版することの理由と目的について述べよう。

台湾と日本は長年さまざまな関係をもちながら、1972年の外交関係の断絶によって、政治的関係は国際政治の表舞台から消え、民間の交流にとって代わったが、その相互依存の関係は経済を中心として、依然として低下していないのが事実である。

一般的にみると日本から台湾に対する印象はかなりの偏りが見受けられる。日本人は台湾の土地を訪れ、そこのおいしい食べ物を味わい、日本統治時代の名残として随所に残る日本的風情を感受しながら、懐かしさに浸り、または感動するのである。そしてそこには台湾という土地の歴史、そこに住む人々の実際問題などを視野に入することは困難であろう。研究分野で見れば、台湾に対しての研究は、日本時代とのかかわりが最も重要視されており、日本統治時代の経済、歴史、文化さらに民族の研究が盛んに行われている。文学分野に関してみれば、日本時代に関わる台湾出身の作家たちの作品の多数が研究対象になっている。当然それ以外の研究も見られるが、全体的に主流になりにくいのが現実である。その理由を考察すると以下の2点である。

まずその1は、台湾に対する歴史的認識が日本の統治という大きな時空的壁に阻まれ、日本中心の視点が過多であり、その弊害として、日本統治時代の前後における台湾歴史と社会問題の客観視に困難さが露呈する。確かに日本の台湾統治時代には、如何に植民地統治を完全になすため、現地についての厳密な調査または開発のための経済、建設など多方面における成果がみられ、現在でも台湾研究に必要な重要資料が多く残されている。だが長期的にみれば、日本の台湾支配は台湾歴史の極一刻であり、その時空だけを中心的視点にすえるなら、その前後の歴史現実と社会の変化が透視できないのは明らかである。

その2について、その1にも関連するが、台湾島の歴史と社会の構成には、長年の原住民と移住民の営みによって成り立ってきた。その移民社会の形式はさまざまな時代によって、その時代的問題が生じている。戦後の現在はずでに日本統治と同等の時間を経過しているし、中国の現代史との深い関わりのために生じる新たな問題、これも決して日本的視点だけでは解明できない部分が多く存在していると考える。つまり日本統治よりもっと長時間に繋がった深い歴史経験が潜んでいるのである。それは現在台湾のすべての住民が、それぞれの時間に関わった歴史であり、またともに歩んできた現実である。その現実には多くの問題を抱え、住民たちがそれぞれの立場で考え、問題を提起し、直面すると同時に、解決に向かうのである。このことを理解するためには、大きな時空的視点で、台湾をとらえなければ、その全体像と真実は見いだせないと考える。

この作品は、台湾社会において、画期的な視点を取り入れ、斬新な思考を提示したものと評価されている。一方、百数十年前の台湾島で発生した物語とはいえ、現在まで世界の各大陸における多くの移民社会の成立過程を映りだす原型の実像でもある。原住民への惨殺、略奪、移民同士の間争と差別など、これらの現実はあたり前のように正当化された時代はあったが、現在では世界的植民地支配、または少数民族差別意識に対する反省は、もう当然の認識として普遍化されて

いる。そして日本人にとって、従来親密感をもつ台湾に対し、新たな視角と感覚で現在の台湾社会の問題を考察し理解を深めるため、この作品はよい手がかりとして期待できる。

以上述べたように、この作品からあぶり出されたエネルギーは、台湾社会に対してだけではなく、作者個人にとっても、その創作人生の過程において、極めて重要な動力源になったことも事実であると考えられる。その点を理解するため、作者自身の創作観について、これまで数回発表された文章を基本にとりあげる。以下は、彼の経歴から述べていく。

二 作家王幼華の経歴

王幼華は1956年台湾苗栗縣頭份鎮に生まれた。父親は中国山東省出身で、中央警官学校本科15期生卒業後、1950年国共内戦のため台湾へ流亡し、台湾現地の獅潭郷、卓蘭鎮、三灣郷、南庄郷、苗栗市、竹南鎮、頭份鎮等の地で勤務した。母親は中国雲南省昆明市馬街の回族出身で、台湾苗栗縣竹南、談文、斗煥、頭份などの地で小学校教師を務めた。王氏は1975年高校卒業後、淡江大学フランス語学科に入学したが、翌年本来の志望と相違するため、中国文学科へ転科している。中国文学科在学中に施淑教授「現代小説選讀」の授業に出会い、その啓発を受け1979年より作品の創作、発表を始めている。当時の創作内容は主に小説が中心で、エッセイ、評論などもある。

1980年作者の聯經出版社勤務時には、中国青年創作協会理事、台湾作家協会理事を務める機会をもち、この期間中、各文学賞の審査委員を務めている。1987年から5年間君毅高等学校教師を務めた後、1989年母校の公立竹南高校の国文教師として16年間勤務している。その間1995年には、学校教師、学生、地元知識人とともに文化社団「雷社」を創立し、地元の古い歴史文化資料を編纂して、地域住民への自由な閲覧を提供するような苗栗縣の文化活動の振興に貢献して、高い評価を受けている。さらに苗栗縣初の「夢花文学賞」を設置し、地域文学の創作活動を活性化に努力し、1999年には地域に「社会人大学」の設置を起案し、創設にかかわっている。同年王氏自身も中興大学の修士課程に入学、在学期間中、苗栗縣文学資料の収集と撰述に従事し、その間《苗栗縣文学史》、《李喬短篇小説全集》、《頭份鎮志》(社会篇)などが出版されている。

彼はこのように地元の歴史、文化の保存と発展に尽力しながら、2001年には《日本統治時代の苗栗縣詩社研究》を修士論文として学位を取得する。のちに苗栗縣の文学研究会などを継続して行い、地元の歴史文化の研究と同時に台湾全体の歴史についても研究を重ねている。その結果2005年《清代台湾漢語文獻原住民記述研究》の論文で国立中興大学中国文学博士学位を取得している。同年国立聯合大学「全世界客家センター」の助理研究員として勤務し、2010年より同大学の「華語文学学科」の准教授兼学科長を務める。こうして王氏の経歴を観察すれば、彼は作家であるとともに、真摯な歴史、社会文化の研究者であることが理解できる。続いて彼の創作観の理解に必要な参考資料として、創作作品を出版年代順に提示する。

三 主な小説、エッセイ作品集の記録と受賞記録

(1) 小説及びエッセイの作品集記録

1. 《悪徒》	時報文化出版	1982年11月
2. 《両鎮演談》	時報文化出版	1983年9月
3. 《狂者の自白》	晨星出版	1985年8月
4. 《慾と罪》	晨星出版	1986年3月
5. 《熱愛》	遠流出版	1989年4月
6. 《広澤地》	尚書出版	1990年9月
7. 《土地と靈魂》	九歌出版	1992年2月
8. 《王幼華集》	前衛出版	1992年4月
9. 《美麗と欲望》	苗栗県文化センター出版	1992年6月
10. 《洪福齊天》	遠流出版	1996年10月
11. 《騷動の島》	允晨文化出版	1996年2月
12. 《宝地図を持って旅に出よう》	探索出版	1999年4月
13. 《私は高貴な精神病者》	華成出版	2002年4月
14. 《独美集》(エッセイ)	苗栗文化局出版	2005年1月
15. 《王幼華作品集》	苗栗文化局出版	2006年10月

(2) 受賞記録

1. 1983年 呉濁流文学賞 (小説《歡樂人生路》受賞) (《悪徒》と《台湾作家全集》の「王幼華集」に収録)
2. 1988年 台湾文部省高校教員研究著作賞 (《韓愈思想論析》受賞)
3. 1990年 中国文芸褒章 (注3) (長編小説《土地と靈魂》受賞)
4. 1992年 中山文芸賞 (小説賞) (長編小説《土地と靈魂》受賞)
5. 2003年 頼和博士論文佳作賞

四 創作観について

作家王幼華は、台湾の文学界から注目されるにとどまらず、その作品が学術的研究対象になることも少なくない。その理由について、以下研究資料を含め簡単に触れてみる。

彼の小説は常に多文化の面貌を顕示し、多領域の知識にも及ぼしている。以下彼の幾つかの作品に触れながら、その創作の形態を見よう。王氏早期の代表作《狂徒》(1982)のように、主に個人の内面世界の描写と経験の探索である。父親が息子を殺害する作品を通して、犯罪意識、宗教情緒、精神異変などの問題を探求するという創作内容の背後には、ロシアの作家ドストエフスキー、トルストイの影響がうかがい知れる。1980年より、断続的に「都市経験」をテーマにした

シリーズ作品の創作を行っている。その中編小説の作品《健康アパート》は、80年代の台湾都市文学の礎石であり、台湾における都市文学創作の風潮を席卷したと言っても過言ではあるまい。王氏の創作理念は、視野が広く、多様な形式であり、かつ宗旨が豊富であるため、これまで多くの研究者の学術研究の対象とされている。

《両鎮演談》は、作者の最初の長編小説である。その描写対象は、作者が熟知する竹南、頭份両鎮である。この作品の創作意図は現代主義、リアリズムの手法を使い、1970年から1980年代台湾経済、政治飛躍の段階下にあるこの両鎮の変化過程を描写している。作品が提起した主題は、宗教、族群の隔たり、原住民の生活、地方派閥、個人のこころなどである。この作品では、作者の広い文学的視野が示され、文学の未来方向を標示したのである。しかしこの作品に対し、王氏自身野心性過大なため、複雑な筋立てが調整できず、混乱さを露呈している欠陥があると反省している。

1990年出版された作品《広澤地》は、「文化沼澤」のイメージをもって、台湾社会全体の面貌を詮釋し、台湾社会の精神的荒蕪、国家アイデンティティーの錯乱、社会風潮の退廃に対して批判する。1994年の《湿気る島》と1996年の《騒動の島》の二作も同じ理念のもとで創作された続篇である。作者は長年台湾の歴史、文化研究に没頭し、人文的思考で台湾社会の現実を分析している。作品における多くの予言式警句は、正確に時代の脈動をつかんでいる。

《土地と靈魂》は台湾初の反漢人的論述の作品である。小説の観点は、当時代の文化論及び文学創作に対し、大きな影響を及ぼしている。この長編作品は一九九〇年代の台湾族群闘争が劣化した中の産物である。作品は清同治年間に台湾宜蘭地方で起こった「大南澳侵墾事件」を基に展開された内容である。その創作目的は、当時台湾社会における族群闘争の愚かさ、現実的利益が良知を破壊する悪行を暴露させ、偏狭化された本土思想に対抗して提言するためである。内容では原住民の悲惨な境遇に多くの関心を寄せている。この点において、作者が一貫して各作品に見られる弱者—つまり売春婦、老兵、原住民、挫折者への人道主義的情緒の再主張が理解できる。

王氏の作品には、もう一つ顕著な類型的諷刺、譏刺的描写が見られる。内容は主に人間の落ちこぼれるところ、その部分をとりあげている。これは彼が中国の「文以載道」(文を持って道を闡明する)の伝統的精神から、文学における知識人の社会的責任を重視する精神の意志表示である。代表作品としては、《洪福齊天》、《超人阿A》、《包青天は永遠に流行る》などがある。作者は知識型の作家であり、当然創作には知識と概念を作品に盛り込むので、読者によっては読解の困難さをきたし、さらに誤読される現象を招くのである。

彼の創作手法は、主に心理的な現実描写が基本でありながら、豊富な想像力、内容も社会的現実を密接に関連させている。早期の作品は作家李喬、七等生氏同様、自己感受の抒懷に留まっているのだが、その理由背景には、彼の成長環境における閉塞的、知識、文化的刺激が不足していることに起因していると考えられる。その後の創作目標は、台湾全体を視野にとらえるような、独特な観点を発露させ、その影響力は決して小さくはない。王氏の作品は、修飾を重視しなく素朴性に富んでいる。大きな野心に満ち、包容性と先見性を持っている。2001年出版された《私は高貴

な精神病者》の小説集では、台湾社会現実の様相を錯乱と曖昧な現象をもって解釈している。さらに人類の歴史文化における「狂乱」を当然視する集団的愚かさをくつがえし、「偽造」「虚構」、「狂想」の手法で、熟知された宗教と文化内容を書きなおし、新たな解釈を加えるのである。その作品の深淵さは台湾文学作品において、別格であると考えてよい。

王氏は文学創作の他「文学運動者」的な特質を備えている。作家に留まらず、文化活動及び社会活動に参入し、文化的な人材を育み、そうした知識人の理念を実現することで広範囲に影響を及ぼしている。以上は王氏の幾つかの作品を通じて、その創作人生と過程について簡単に述べたが、以下は創作観について語る。王氏は自らその「創作観」について、これまでに5回の記事を公表している。その内容は以下である。

- ①「私の都市文学経験」 《台湾春秋》雑誌1988年12月)
- ②「ある作家の反省」 《活水》1992年8月)
- ③「ある作家の反思」 《中時晩報副刊》1992年8月)
- ④「顛狂者言一《宝地図を持って旅に出る》について」 《文訊》177期2000年7月)
- ⑤「独美集序」 《独美集》2005年1月)

(1) 「都市文学」における創作観

ここで王氏の創作観を理解するにあたり、まず彼の創作過程で、大変重要視せねばならない都市文学に対する考え①「私の都市文学経験」を摘録しながら見ていく。

①の内容に、王氏が「都市文学」について、都市とは、大量の人が集居し、優れた人材が寄せ集められ、工商業が繁栄しているところで、各業種が激烈に競争し、政治と軍事の重要地である。さらにそれぞれの時代に生きる人びとの美夢と悪夢をみるところであり、尊栄と屈辱を受けるところである。そして歴代で都市の諸相が描写された書物は多くあるなか、《三都賦》、《兩京賦》は最も奇麗な都市描写の著作であり、《西京雜記》、《東京夢華錄》に都市の人文的記述は、人びとにとって忘れがたいものである。現代都市文学の芽生えは、18世紀末の産業革命の機械文明の発生にさかのぼらねばならない。それ以前の作品は、「古典的都市文学」と名付けるのである。工業革命後、世界的大都市の人口が一千万人単位にあがり、物質的、機械的、電子的に無生命な道具が人間の本来あるべきところと肉体を断絶している中、文学の描写には、賛美と詛咒または逃避と享樂など多様な面貌が現れ、「工業革命後の都市文学」と言えるのだと、文の冒頭で「都市文学」の定義を定め、その派生と時代的変遷を闡明している。

さらに、台湾における都市文学の派生と展開について、1990年までの台湾はまだ開発途上国家であり、国民の生活水準と工業化の程度も典型的な「発展途上国」であるが、1980年代初めには「工業革命後の都市文学」の気配がすでに現れていたのだ。それは80年代の台湾各種の発展過程を検視すれば一目瞭然であり、この気配が台湾島の転換期における一大脈動であるといえる。そして「工業革命後の都市文学」も奇跡的な商工業の発展とともに、この土地に到来したと指摘する。

1978年の台湾では「郷土文学論戦」^(注4)が隆盛時期にあたり、これはちょうど王氏の創作準備

段階に重なっている。当然彼もこの文学風潮と関わることになるのだが、「郷土文学論戦」の影響は広範囲であり、重要な作品が多数創作されたため、中国全体の文学史においても、貴重な収穫であると言える。当時「郷土文学」は「郷村文学」と解釈され、よってこの類型の作品が大量に産出されたのである。この時代風潮下、王氏自身もこのような作品を数篇試みたが、やはり郷村経験不足のため、そして1980年代以後、社会は農業中心な経済型態から離脱し始めているから、台湾全体の面貌はもはや「郷村文学」の範疇でカバー仕切れなくなり、時代の反省者として、彼は「都市文学」が彼自身とのかかわりについて、この時期から自身が商工業社会の深呼吸を探索する方向へ転換するその背景と経緯を語るのである。

また郷土文学論戦の位置づけについて、論戦自体は作家の宋澤萊氏以後、その時代的使命はもう結束されているし、そしてそれ以上の内容が豊富で新たな作品も見られなくなったということがある。その創作理念、芸術的深度においてもさらなる突破がなく、世界における同型の文学と比べても脆弱さはまぬがれないであろう。この文学のリーダーたちは80年代に対して適応不良に落ちいり、この時代を代表するような作品の創作はできなくなっていた。つまり当時の作家の黄春明、王拓などの作品から発せられる80年代の声は、新たな展開を待たねばならなかったのである。しかし台湾の内外環境の制限、文化的土壌の稀薄さのなか、現実主義を志した作家らはこれだけの作品を創作できたことに対して、その成績が脆弱であるとはいえ、貴重であると王氏は考えている。

1980年代以後、台湾社会の変化が目覚ましく、政治経済ともに大きく進展し、社会形態も大幅に転化され、人々の生活様相は迅速に発展する時空の中において、複雑かつ多様に表現するようになった。当時王氏自身も学業と仕事のために都市へと移っている。田舎の小さな町で成長した王幼華にとって、当初都市生活は不適応現象を生じさせているが、都市に対する冒険的经验が、逆に彼に観察と記録するという行為の興味を啓発したのである。台湾の都市化現象は、例外ではなく一般的に絶えずに急速に拡張されているのであるが、自身の創作もその急速な都市化現象の趨勢に相応、適応できたといえる。この時代の脈動を把握するために、試行錯誤を続け、粗末な試験的作品も数多く書いている。これら作品の特徴には、都市の多忙な雑乱性、虚飾、病態的表面を過度にとらえたという欠点があり、また当時は、自身と同道の創作が見当たらないことには寂寞感も生じさせている。

1982年彼は初めての長編小説《両鎮演談》を書きはじめ、台湾社会の1970年から1980年の経済、社会、文化などを大雑把な研究を行い、未成熟な理念と知識を運用して創作をするが、結局意図と野心だけが大きく、その創作目的と方向は終始世間に受け入れられることはなかった。王氏は後にこの時期の創作心理と過程を顧みて、一途に新方向へ前進し続けたただけであったと深く反省をしている。

実際王氏の都市文学の創作状況について、作品《健康アパート》を中心に、都市経験をテーマに系列で発表した作品は20万字にあがる。これらの作品に対し、一貫して批判的、写實的、心理的探索の手法を用いて、作品の主題は現代人の道德問題、心の困惑、適応不良及び生活環境の諸

問題であると彼はいう。そして都市文学の礎石といわれる《健康アパート》について、1980年に完成したものの、某出版社に発表を遅延され、1981年末になってようやく文学雑誌《中外文学》に発表されることができたのである。同年作品《都市生活》シリーズ約10万字を創作しているが、発表できたのはわずかである。その理由は作品自体の芸術性の不足のため、編集者に受け入れられなかったのである。これらの作品について、意識的創作であり、台湾80年代の面貌を浮き出すための努力だと彼は考え、後に意図的に作品群の大部分を同主旨の創作として《狂者の自白》作品集に収録しているのである。彼はこの時期において、将来的な都市文学の位置づけを考えた場合、自分の創作方向が詛咒派であり、都市文学発展の主力にはならないであろうと認識し、この領域の開拓は、後継の作者らの努力を待つことになるかと分析している。さらに当時の都市文学の特徴について、80年代中期に出現した作家の孟東籬、粟耘、陳冠學らの田園、山水など逃避式の作品と比較すれば、明白であろうと指摘する。ここで彼の一貫した創作意識の深層を洞察することができよう。

80年代の台湾の都市文化と国際化の実情と言え、先進国家と比べてかなり遅れている。しかしその政治、歴史背景が変動し続けたことによって、「台湾経験」の内容には特色と豊富な色彩に富み、そこが住民たちの故郷であるという認識をもつべきだと王氏は指摘している。彼の抱く台湾という土地に対する愛情と期待は、のちの作品《土地と靈魂》にも重厚に描かれている。

また、彼は台湾「都市文学」の趣旨と展開の方向は、30年代に中国本土で展開された都市文学とは相違すると指摘している。当時上海の文人の穆時英、張若谷、劉呐鷗など都市文学従事者は、この文学領域を確立させようと極めて意欲的であった。彼らの作品には頹廢、姪蕩、機械文明に対する讃頌が多く、華麗な文藻表現と官能の放恣から典型的な「工業革命後の都市文学」の讚美派であるが、その努力はすぐにも政治と戦争によって崩壊させられてしまうのだ。そして王氏は、これら約50年前の作品から啓発を受けることはなかったという。

文章①を書いた時期、それは王氏が仕事の関係で住居を都会（台北）から生まれ故郷に移して5年を経過した頃であるが、彼が都市文学に目覚めた当初と違って、すでに多くの作家がこの文学領域へ志し、創作基盤もよくなっている。そして彼は多くの作品にみられる内容と題材が自分の創作理念に類似していて、都市文学としての代表作は未だに見られないと残念に思うのである。反面、時代的にこのような類型の作品が人びとの思想領域に受容され、重視されるようになったことに対し、称讃すべきだと考えるのである。

文章①最後の部分、王氏は都市文学が80年代、90年代の重要な思潮の一つになると確信するとともに、台湾社会の政治、社会、経済の大きな変動のなか、「準開放式の社会」の到来を予測する。さらに都市経験を創作するにあたって、欠かせない要素は変動的、巨視的、多様な芸術的刺激及び多彩な面貌を表現、発揮することが要求される。そして価値ある作品は「ラベル化」的に範疇されることは避けなければならない。都市文学の内容は豊富であり、可能性は極めて大きいため、創作者は思想植民地の困境から突破し、努力すれば、必ず世界級の作家が出現すると自分の創作観を示すのみならず、後の台湾都市文学の発展への期待も語ったのである。

文章①で語った創作観は彼が都市文学創作の動機についての阐释だが、彼の創作の原点である理念が示唆され、その創作手法と志の一貫性がうかがい知れる。彼が台湾都市文学の草分け的存在であると同時に、その後台湾の都市文学の展開に、1994年「当代都市文学研討会」^(注5)が開催されるに至れば、都市文学の領域が確実に定着されたといえることができる。

次は彼が②と③の文章で明かした創作観について触れたい。②と③のタイトルは「ある作家の反省」と「ある作家の反思」で、意味は類似するが、異なる視角で述べた内容である。両方とも雑誌からの要請を受けて書きあげた原稿のため、それぞれの雑誌編集者がタイトルを決めたということである。ここでは②と③を同時にとりあげる。

(2) 「自己反省」における創作観

②の冒頭からまず彼は知識人であれば、社会に貢献でき、文化の構築に参加できる使命感に迫られるのは当然だと述べる。しかし人間社会の万事万物が「真理」に沿って進行することなく、宗教の力に頼る人も、宗教に誤惑されることもあれば、意識形態を中心に考える人も却ってそれに流されてしまうことがある。だが彼自身の体験からすると、文学は自分の真理への執着を満たすことができ、人生をより豊富に、精神力を強く加えることができると考える。また真理、宗教及び意識形態も頼れない世の中、作家は現在の社会において、知識界また庶民への影響力が衰退している。その宣伝性、行動力は遥かに歌手、TV、映画及びマスコミの従事者に及ばないのである。文化活動に関しても、厳粛な作品の読者は極少数になっている。享乐的、消費的、激烈な刺激に対するニーズのもと、作家たちも思考と心態を変え、市場および盲目的な喝采に迎合し、粗末な慾求のためのサービスを要求される現状に対し、彼は嘆息し、台湾に開拓性または流派を独創できる作家と作品はまだ見られないと指摘する。その理由について、この時期の絶大部分の作品は中国の20、30年代文学、または東、西洋文学潮流を模倣する段階にあるため、批判と分析に耐えがたいのである。これは台湾の過去の歴史がずっと卑微な状態であり、また島としての性格に関係するが、作家たち自身の心態の怯弱的と創作に没入しきれていないせいであると指摘する。そしてこのような批判は一個人の見方であり、苛刻すぎるかもしれないが、しかし、自分も台湾での物書きの一人として、常にこのような認識を持って自戒すると語るのである。

また彼は当時台湾社会の現実と文学の関わりに対し、従来台湾の文化特質には「恒久と偉大」の観念が欠乏し、その内面的精神現象は常に変動的、表面的、投機的であるという。当時流行の合板の建売住宅がその集団心理の最適な象徴である。速成的、臨時的、劣質の仮象は、誇示するような華麗さに満たされ、強烈な欺瞞と不安定性を抱くが、驚くことに、大多数の民衆はこのような虚妄のものに対して、平気で受け入れられるのであると指摘する。同時に文学従事者の心態はどうだろうか？恒久で偉大な作品は、この土地と社会から生まれることはできるのだろうか？台湾の作家たちは、このさまざま劣悪な環境を突破して、世界的な作品を書きあげられるだろうか？と疑問を投げかけながら、その疑問がただの希望或いは壮志にすぎず、かなえられる美夢であるようにと期待するのである。

③の内容は②と違って、台湾文学界への関心と想いを語るのではなく、自身の生活経験の波乱と挫折、更に心の葛藤を創作観にもたらす変化を述べている。彼は②を発表するまでの十数年間、かなり長い習作時期を経過している。そしてこの時期の作品は雑乱で、意象が跳躍し、焦点も外れ、内在的に有るべき秩序もなかったとふり返る。これらの現象は、如実に当時の心身状態をあらわしている。風に飛ぶ柳わたのように、落ち着く場が見つからず、結局試みも理想も破滅され、無数の挫折を経験した後、ようやく現実社会へ戻れたのである。その間には自尊心を失い、僥倖と虚無の妄想をせずに、落ち着く場所にたどり着き、真面目に生活するようになったのである。それ以来、習作と動揺する創作の心理状態から脱出したが、大学院への受験、求職活動などの失敗で、生きるための生命力を費やすような、人生の苦難時期を過ごしたあと、職が見つかり、生活の余裕はないながらも、奮闘しつつ成長し、精神的にも充実しはじめたのである。それまでの約6、7年間、現実生活の重圧と一連の厳しい試練を乗り越えるため、単独で奮闘し続け、そこに自然と自身の作品には陰鬱と尖刻さが露呈していると彼は考える。

当時の創作意欲について、実際自身の境遇は特別なことではなく、他人と同様で、毎日の生活のために、必死に働かなければならないだけだった。ただし、自分の敏感な神経と豊沛な感情が現実の様々な劣悪な感覚によって麻痺させることはできないし、常に創作したい衝動と力量が湧きあふれて抑えられなかったという。自分の作品には批判性が強いと、一般の編集者と人びとに歓迎されないという覚悟をもって創作を続けるが、出版困難な状況の中でも、彼の作品は続けて発表され、出版する機会を得たことに対し、寛厚な文化界の友人らに感謝するのである。当時彼自身の心境は、消極的であり、日常生活でも自分が文学創作の従事者であることを隠し、文学を語ることもできるだけ控えるようにしていた。その理由は、それまでの創作から得た栄光よりも屈辱の方が多かったからである。だが、彼はそれでも書き続けたのである。

創作の意義について、創作は自分の思想と心霊を鍛える重要な仕事であり、自我の探求と認定であるという。創作において、自分及び世界のことを定め、生命の境界を高めるのであると彼は考える。その作品は、理念、境界の追求及び小説の概念化により、一般読者のニーズには距離があり、市場がないことを承知のうえで、妥協せずに書き続けたのである。幸いにこの時期から王氏は公立学校の教員を勤めることで、経済的状況が好転して生活も安定しはじめ、その影響で自己の文学活動の名利には、淡泊になったと述べている。経済的に安定をえた生活は創作にも影響しはじめ、過激な感情はより冷静になり、問題を整理する時間もでき、事実彼にとって、それは未来の創作人生に大きな活力を、心身ともに与えたと言える。

②と③が発表された年、彼は長編小説《土地と靈魂》で1992年度、台湾の文学界大賞「中山文芸賞」を受賞している。これは当然②と③の発表後のことである。これまで②と③で語った彼の物心両面にわたる苦難の歷程とその人生経験から、確かに創作活動と精神に陰影はみられるが、それは決して無駄ではなく、創作活動の鍛錬基盤になっていると考える。

(3) 「癡狂者の言葉」における創作観

「癡狂者の言葉」は2000年発表された④の内容についてである。1992年の作品《土地と靈魂》が文壇から高評価を受けた後、彼は母校の高校教師を務めることによって、生活の経済的な安寧さは精神的にも余裕を生じさせ、地元での文学活動を活発に行い、さまざまな地方文化資料の収集整理に貢献している。そして1999年には念願の大学院に入学しながら、詩人の莫渝とともに《苗栗県文学史》(40万字)、《李喬短編小説全集》(11冊)と他に《頭份鎮志》(12万字)を出版している。2001年には修士学位を取得し、2005年中国文学博士学位の取得がなされ、彼の研究者としての精進も多く、成果が日の目を見ている。当然彼の創作活動も中断せずに続行されているのだが、この時期の人生経験と現実の生活背景を理解しながら、作品「癡狂者の言葉」に触れてみたい。

「癡狂者の言葉」は彼の長編小説《宝地図を持って旅に出る》について書いたものである。文の冒頭に「私はずっと宝物さがしを続けている、信じなければ書いて見せましょう。」と書いている。ここで言う「宝物」は、単純に解釈すると、自分の人生の成功であると考えられる。④の内容に自分の人生の成功といえば、研究者としてまたは作家としての成功を考えているようである。研究者としての成功はまず、研究する場を得ることである。また作家としての成功は、作品が文学賞を獲得すると考える。成功することに執着する理由は、自分が文学従事者として、研究の場を与えられ、創作の理想が受容されて、ようやく文学者としての地位が確立されると考えるからであろう。よって、この④の内容には、自分の大学院受験の波乱と屈折した経験に、当時の学术界の闇世界を混ぜあわせながら告白している。そして文学賞に執着しながら、失敗を恐れずに追いかける経歴をおしみにく語っている。ここでは文学賞が彼の創作とかわる部分について見る。

彼は小説賞の応募歴について、まず《聯合新聞》の短編小説賞に対して、少なくとも6回応募しているが、《中国時報》小説賞、推薦賞の応募回数は数え切れないほどである。④の文章を書く2年前までも応募したそうだが、当然受賞することはなかった。最も悲惨なのは《自立晩報》の百万小説コンクールの応募経験である。この賞はそれまで4回行ったが、応募する目的は、賞金と栄光の獲得である、なぜなら賞金があれば、専業作家として生活できると彼は考えたからだ。実際彼の3つの長編小説《兩鎮演談》、《広澤地》、《土地と靈魂》をさげてこのコンクールの決勝まで残ったが、結局1回から3回までは、該当者なしで、第4回目は他の作品に譲ることになっている。専業作家の夢が破たんをきたし、高校教師を続けることになったのである。

百万小説のコンクールのために5、6年間を費やし、結局「成功」とは空白のままだった。当時彼は文学界の友人から、「そんな賞に執着する必要はない、君のように3回も応募する愚か者はいないんだ。」と勧告を受けたと自嘲した。幸いにも、彼の長編小説《土地と靈魂》の出版後、知らずに推薦され、1992年の「中山文芸賞」を受賞したのであった。上述した経歴をみれば、この作品の受賞は彼の創作人生に多大な価値を示し、貴重な意義をもたらしたに相違ないと考える。

実際《宝地図を持って旅に出る》もまた《皇冠》雑誌百万小説コンクール応募するための作品であった。第一選考段階で落選の憂き目にあっているのだが、簡単に落選したその理由について、

彼は作品が長く、載せてくれる出版物もないからであろうと述べている。一年後にやっと友人によって《台湾新聞》に連載しはじめ、出版することができたのである。

続いて彼は創作の仕事について、大変困難でつらい作業であると言う。十数万字の小説でも七、八カ月かかるし、その間心身ともに疲れ果ててしまう。そして作品の完成後には、適当でいいかげんな批評にさらされ、また悪意的に排除されて、発表さえおぼつかないことも実際にある。理想主義者の敵が卑劣な行為であることを明示するため、彼は《宝地図を持って旅に出る》を創作し、自分の思いをストーリーに反映させ、主人公たちを通して、自分の心得を読者に吐露したと語っている。

(4) 「独美集序」における創作観

⑤の「独美集序」は2005年彼のエッセイ集《独美集》の序文である。王幼華は自分の得意でないエッセイの創作について、かつて中国文学史上の巨匠魯迅又は夏丐尊が自分の師匠であるという。彼らからは、如何に陰鬱の心境から自分の情感を抒発し、完璧でない処世態度において、人生の困境を噛みしめ、さらに長い暗闇の中で、世に発信し続けるのである。そして創作は泥沼の道を歩む現実であるが、自己完成の美感を得ることができることを教わったと語っている。

この文章は2005年1月に発表されたのである。同年6月に中興大学の博士学位を取得し、その後現在にいたるまで、国立聯合大学に勤務している。これまでの生活に比べ、最も研究と創作にとって安定した環境であるといえる。そこで彼はこれまでの創作人生を顧みながら、文学の真価を再確認する。

かつて自身が敗壊と死亡へと走り続け、心身ともに陰鬱に落ち込み取り戻せないと気付いた時、自分が如何にして生命の存在が継続できるかを問い詰めたのである。そしていう、「文学」は自己の存在を検証する「鎮魂術」かもしれない、生き続けているのは、道士が葬式で行う「祭礼」とも考えられるが、この「祭礼」は死者と生者両方の慰めであろう。道士の高い術により、死者は自分が生き続けていると思わせ、また生者には死者の靈魂が活動を継続していると錯覚させるのである。しかし祭礼は終わり、すべての祭壇がとりはらわれ、いずれ静謐な時空に帰結するのである。結局「文学」が肉体の消滅にとって代わり、「作者」という人間の存在の痕跡になり、また作者の人生の経歴の証であり、道標であるとして、自分の問いかけに自らを締めくくっている。

五 結語

王幼華は1978年から多くの新聞、雑誌に文章を発表し始めて以来、さまざまな文学界での活動に携わり、文学関係社団活動にも精をだし、高校教師の職務のあと、数度の困難を乗り越えながらの創作人生、学業における真摯な努力が理解できる。上述した彼の創作観に関する5編の文章において、①、②、③は受賞前に書かれたものであるが、さまざまな重圧の中から貫いた覚悟で、時代を透視しながら、実に多くの創作を成し遂げたのである。作品《土地と靈魂》の「中山文芸

賞」の受賞は、王氏の創作人生において、重要なポイントであるし大きな出発点である。またこの作品を高評価しえた台湾出版界に、希望の灯をみいだすといえは過言であろうか。多くの台湾を含めた中国の人びと、あるいは台湾と深いかわりをもつ日本の人びとに読んでほしい作品である。

注釈

注1：《土地と靈魂》 王幼華著 1992年 九歌出版社

注2：「中山文芸賞」は1960年台湾「中山學術文化基金会」によって創設された「中山學術文芸賞」である。毎年一回受賞作が発表される。この賞には、「學術著作賞」と「文芸創作賞」の二分類に分けられている。前者は社会科学研究著作が対象である。後者は「詩詞歌曲賞」、「国楽（中国古典音楽）作曲賞」、「詩作賞」、「エッセイ賞」、「小説賞」、「金石篆刻賞」など文学芸術作品が対象である。

注3：「中国文芸褒章」は1960年台湾の「中国文芸協会」により創設されたのである。創設の目的は、優秀な文芸従事者を表彰し、文化建設を促進するのである。審査基準について、三条件がある。①文芸活動に従事して10年満たして、作品に影響力がある。②作品には特別な貢献がある。③45歳以下、品学兼優である。①と②についていずれかが満たせればよいが、③は絶対必要条件とされている。

注4：1970年代初期の台湾において、現代派の文学論争後、郷土への回帰、現実社会に直面する創作風潮が台湾文壇の主導的地位に占めつつある実態に対し、1976年から、郷土文学の主題性及び内容範疇に対し、多くの議論が及んだのである。この論争には、文学の民族精神と民族形式、文学の人間性と社会現実への反映の問題など官民両側を含む広範囲において論議されたのである。内容的にも文学路線の論争にとどまらず、戦後台湾の政治、経済、文化、教育各方面に関わっている。また「郷土」への定義の曖昧さから、台湾本土意識への転向とつながり、80年代に入ると、郷土文学の名称は台湾文学にとって変わったのである。

注5：「当代台湾都市文学研討会」は1994年12月25日から27日まで時報文化出版社と中国青年創作協会共同開催によって行われたのである。のちに会議論集として《当代台湾都市文学論》を1999年時報文化出版社によって出版された。

（本論は24年度筑紫女学園大学個人研究助成による研究成果である。）

（せき きりん：アジア文化学科 教授）